



高森 拓也 (たかもり たくや)

1960年、兵庫県・浜坂町（現・新温泉町）生まれ。

鳥取西高自主卒業後、上京。理容師をしながら貯めたお金を元にアフリカー人旅に。

二十二歳で東京・西日暮里に最初の私塾「拓庵」を結ぶ。三十歳で兵庫県・浜坂に帰郷し、私塾を再開。三十五歳のとき、子ども達中心のNGO団体〈子どもNGO「懐」〉を創設。日本の子ども達に“世界”を意識させ、机上の知識にあぐらをかかず、体感することの重要性を伝える活動を行っている。98年から始めた、子どもをアジアに連れ出し命を学ばせる「夢便」はこれまで7便を実施。

国際ボランティアを通して語る【命】をテーマとした講演では、イジメ・自殺問題にも経験を踏まえた独自の見解で問いかけ答えていく姿が大きな反響を呼び、全国の子ども達や、保護者、教育関係者、さらに海外においても強い関心を受けている。特に東京都では、都内の小・中・高・大学のべ40校で80回を超える講演・授業を受け持つ。東京杉並区においては、自らの行動をもって手本を示す「答えを持つ大人」として、区内の子供たちの心の師となっている。

東日本大震災では、一週間後には現地入って支援活動を行い、二か月後には青森県から東京都までの太平洋岸全被災地を50ccバイクで縦走視察。2011年の被災地入りは計6回。2014年3月、東日本大震災被災者支援活動により厚生労働大臣から感謝状を授与される。夢便は中学生用人権資料（兵庫県教育委員会）にも掲載されている。

アジア、アフリカ、中東、北米、南米、東欧など、世界の紛争・貧困地帯を中心に、世界六大陸51カ国と一地域（南極）を歴訪。

ミャンマーの伝統文化の普及に努めるミャンマー新政府ラウェイ連盟の日本代表でもある。



東京／天沼小学校



東京／泉南中学校



東京／國學院久我山高校



兵庫県／小田高校



京都／智積院

● 「懐」設立の理由

- ・「命のリアリティ」というものを感じ取れていないかに見える日本の子ども達に、自らの旅の経験を通して、その尊さを伝えようと設立。
- ・教室での「命」の伝達に限界を感じ、98年より子ども達を直接アジアに連れ出しての“地球が教科書”の「夢便」を实践。
- ・国内においては、世界で活躍するアーティスト、文化人の協力を得て、それぞれの経験、実践を通して、子ども達に“命の伝授”をしてもらう。

● 命とふれあう旅「夢便」の趣旨

大地に息づく人々の営みを鏡に、自らの存在意義を見いだしていくことを目的とし、異文化間で感じる相違性ととともに、その底流にある「同質」なるものをも自力で発見し、成長していくことを期待する。

● 「夢便」の内容

* **夢第1便 (ネパール) 1998年3月** = 難民キャンプの子ども達に日本で集めた文房具を直接届ける。精神薄弱児養育施設の訪問やヒンズー教の葬送見学などをする。

* **夢第2便 (ミャンマー・ベトナム) 1998年12月** = ミャンマーで開かれた「ワクチン一斉投与デー」に参加。自分達の募金で購入されたポリオワクチンをミャンマーの乳幼児達に直接投与する。

ベトナムでは、ツズー病院を訪問し、ダイオキシン障害の死産した奇形胎児が保管されてある「標本室」を見学。その後、ダイオキシン障害のある子ども達の病棟を訪れ交流する。

* **夢第3便 (モンゴル) 2000年** = モンゴルの雪害被災地に日本で集めた衣類や、チャリティーコンサートでの収益金で購入した米・小麦粉・茶葉を直接被災者に手渡す。ストリートチルドレン養育施設、少年院、孤児院なども訪問。

* 夢第4便(韓国・中国・モンゴル) 2002年 = 孤児養護施設訪問。ウランバートル第一病院を訪問し、乳児に日本から運んだ粉ミルクで作ったミルクを授乳。

* 夢第5便(バングラデシュ) 2003年 = 硫酸犯罪で顔が焼けた少女達の施設での交流や、貧困児童養育施設、レイプ少女自立支援NGO、世界最大NGO「BRAC」の教育活動、国際医療活動に取り組む日本の「AMD A」などの実践行動を学習し、交流をする。

* 夢第6便(ミャンマー) 2004年 = HIV感染者支援施設、ユニセフでのエイズに対する学習。ミャンマーの児童医療に尽力する日本人医師の病院を訪問。ミャンマー芸能界の協力を得て、HIVチャリティーコンサートをヤンゴンで開催。

* 夢第7便(ミャンマー) 2008年12月～2009年1月 = サイクロン被災地への支援活動、HIV/AIDSチャリティーバザー&コンサート。

<夢便参加人数>

夢1便(ネパール) 1998年3月	子ども29人	大人7人	= 36人
夢2便(ミャンマー・ベトナム) 1998年12月	子ども23人	大人8人	= 31人
夢3便(モンゴル) 2000年	子ども29人	大人10人	= 39人
夢4便(韓国・中国・モンゴル) 2002年	子ども16人	大人6人	= 22人
夢5便(バングラデシュ) 2003年	子ども6人	大人8人	= 14人
夢6便(ミャンマー) 2004年	子ども17人	大人5人	= 22人
夢7便(ミャンマー) 2008年12月～2009年1月	子ども11人	大人7人	= 18人

計 子ども131人 大人50人 =181人

<東日本大震災 被災地支援活動>

- 2011年 3月19日～21日 宮城県：多賀城市総合体育館避難所、東松島市野蒜中下地区避難所
- 2011年 4月 9日～10日 宮城県：東松島市野蒜中下地区避難所、宮城県：女川町石浜地区
- 2011年 5月11日～17日 青森県～東京都(東日本全被災地 高森が視察)
- 2011年 7月24日～26日 宮城県：東松島市野蒜中下地区避難所、仙台市ニッペリア仮設住宅
- 2011年 9月19日 福島県：緊急時避難準備区域(原発20km～30km) 高森が視察
- 2011年12月30日～31日 宮城県：東松島市響仮設住宅、東松島市矢本仮設住宅、仙台市ニッペリア仮設住宅
- 2012年12月30日～31日 宮城県：亘理町中央工業団地仮設住宅、仙台市ニッペリア仮設住宅 東松島市響仮設住宅、東松島市矢本仮設住宅
- 2013年12月30日～31日 宮城県：亘理町中央工業団地仮設住宅、東松島市響仮設住宅、東松島市矢本仮設住宅、

命の尊さを伝え20年

「生きる意味知って」

新温泉の高森さん

講演170カ所、広がる共感

子どもNGO「懐」代表 活動体験を紹介



自分自身の経験や「夢便」の活動を子どもたちに話す高森拓也さん―東京都杉並区内

新温泉町で地元小中学生とともに海外の災害被災地支援活動などに取り組む「子どもNGO

『懐』代表の高森拓也さん(50)＝同町浜坂＝が、自身の体験を通し、命の尊さを伝える講演を続けている。1990年から足かけ20年。訪問先は県内外延べ170カ所を超え、各地で共感の輪を広げている。(大盛周平)

先月初め、東京都杉並区で開かれた高森さんの講演に約120人の聴衆が集まった。ベトナム戦争で使われた枯れ葉剤の影響で亡くなり、ホルマリン漬けにされた胎児、それを見て涙を流す日本の小中学生…。世界各地の「命」の重みを伝える映像が映し出された。「生きてくても生きられなかった命のことを考えれば、人に『うざい』『死ね』と言えるか」。高森さんが話すと、会場からはすすり泣きが漏れた。映像は、高森さんが企画する支援活動「夢便」

講演依頼を受けるようになって、口コミで評判が広がった。「命の大切さが分からない子が多い。親も子に見せられる背中を持つていない」との危機感から、要請にはできるだけ心えてきた。講演を聞いた全国の人から「自分が情けない」「生きられない命のことを考えたい」など多くの感想が届く。「自分の話が必要とされるのは、社

西本佛壇店
0120
015575

旅してきた。90年に中学校で体験を語ったのが講演活動の始まり。92年に郷里の新温泉町に戻ってからは、英語塾を開きながら小中学生と「命」について考えてきた。高森さんの活動を知った東京の小学校などから

会の病巣がまたなくなっ
ていないということ」。
そんな複雑な思いも抱き
ながら、高森さんは世界
で見た「命」を伝え続け
ている。

津波で車や資材などが押し流された川＝宮城県東松島市野蒜
(子どもNGO「懐」提供)



NGOが見た東日本大震災

東日本大震災の発生から1週間後、新温泉町の子どもNGO「懐(ふとろ)」の高森拓也代表(51)が、同グループのメンバーらと被災地へ支援に向かった。一行は食料や医薬品など約200人分の物資を積んだ車で3日間、宮城県や福島県の4カ所を訪れた。中でも衝撃を受けたのは、宮城県東松島市野蒜の被害。津波に流された車が突き刺さった家屋や、泥にまみれた資材が広がっていた。高森代表は「津波に警戒心が強い地域がなぜこんな目に」と言葉を決つたという。
(風斗雅博)

■新温泉の「懐」・高森代表 ■

民間の力迅速な活用を

宮城や福島 津波対策 必要性を実感



野蒜を離れて間もなく、同じ経験から、「同じも気付いたのは、故郷の浜のを長期間食べ続けると坂によく似ていたこと。体が受け付けなくなり、美しい砂浜や町並みを眺めると、ストレスも大きい」と指めるうち、「うちの町に揃う。

同じ事態が起きたら」と、離れた故郷に思いを寄せた。「天災からは逃れられない。津波を想定した訓練を、自治体はもっと真剣に考えるべきだ」と主張した。

野蒜の避難所ではいすも机もない中で、寝ころびながら勉強していた男子高校生がいた。母親に聞くと「ほかに行く場所がない」と言葉少なに語った。

そんな中で物資を届け、房具を届ける予定。また、た3カ所の避難所で、特に喜ばれたのはバナナやオレンジなど生の食べ物。高森代表はミャンマーやソボの被災地を訪と地球の基金」まで。

民間ボランティアによる支援の必要性を語る高森拓也代表(新温泉町浜坂)

Japanese NGO teaching children life lessons

Japanese teacher Takamori Takuya is worried about his country's students, as well as about South Korean kids. "In the last seven years the suicide rate of children in Japan has been steadily increasing," said Takamori, who founded Japanese children's NGO Futokoro to help tackle the problem.

"The reason the crime rate and suicide rate is so high is because these students don't value the meaning of life."



Takamori Takuya gives a talk to Korea University students on his recent visit to Seoul.



Student volunteers with Futokoro prepare crab soup to disaster victims in Japan's tsunami-stricken Miyagi prefecture in December last year. (Futokoro)

According to Japan's National Police Agency, there were 30,651 deaths from suicide in the country in 2011. Among those taking their own lives, were hundreds of children under 19, and thousands of people under 29, Takamori said.

"According to the news from Japanese TV and newspapers, I think it is not only a serious problem in Japan but also in Korea," said Takamori. "I feel that the children don't understand the importance of life."

For this reason, he founded Futokoro to help give kids in his country a different perspective on human values.

"The education of the children should not be only for going to a better university and for getting a better job, the education must connect to get a better life, for the better society and for saving someone, for giving happiness to someone," he said.

"I think that perhaps it is same in Korea, which is still remaining an education-conscious society and only strives to acquire precious knowledge."

He was prompted to start taking Japanese students on trips to experience less developed countries after hearing about one particularly shocking child suicide case in his country.

"Twelve years ago, a 12-year-old female Japanese student committed suicide, and this news wasn't a shock in society," he said. "She left a short note. In it there wasn't anything concerning who she was bullied by. It said: 'Sorry for being so ugly. It would have been great if I wasn't born.'"

And he said this sense of "Kimoi" — which roughly translates as "to feel bad about oneself" — is a growing trend among students there.

"Although there are no physical conflicts in Japan, there are still words and practices that can amount to physical casualties in Japan," he said.

"In Japan, going to a decent school and getting a decent job is the most important thing. But rather than focusing only on study and academic activities they should also focus on teaching people to value and respect others.

"As a teacher, I also want to applaud my students' academic activities but I also want to teach the importance of human life to the students around the world. And that is why I have gone on these journeys."

Middle school students on one trip to Vietnam were moved to tears by the sight of deformed babies preserved in glass jars, the victims of exposure to dioxins after the Vietnam War.

Other children visiting a Mongolian orphanage saw the process of preparing a lamb from slaughter to plate. And another trip to a Bangladeshi home for women horrifically scarred from acid attacks was screened on Japanese TV.

"I started this work because for the last 10 years the child crime rate has been increasing," he said.

"The crime and suicide rate in Japan is steadily increasing and this is a big problem. As a solution to this problem we have taken some Japanese students around Asia to teach them the true value of life," he said.

While these trips were made about a decade ago, Takamori is still carrying out his life-changing work. Most recently, he took Japanese middle school students to help with recovery efforts following the earthquake and tsunami in their country.

And last week, Takamori visited Korea to give talks to Korean school kids and students at Korea University — showing them footage of his trips.

Takamori who hails from the town of Shinonsen-cho, some 600 kilometers from Tokyo, is now organizing a concert to be held in Myanmar toward the end of this year. The show will feature Japanese and local acts to raise money to provide medical care for people living with HIV/AIDS there.

新温泉から東京で広がる活動 命の尊さを説く授業10年

子どももNGO「懐」代表

東日本大震災の被災者支援などに取り組む、新温泉町の子どもNGO「懐」。年の瀬に宮城県を訪れ被災者を励ます活動には、東京の教育関係者も参加する。高森拓也代表(53)が東京都杉並区の小学校などで続ける「命の授業」を機に、懐の取り組みに共感した人たちが、命の尊さを説く授業は今年で10年目。但馬地方の小さな町から始まった活動の輪が東京で広がっている。

(熊谷暢聡)



新温泉町の子どもたちの活動を教材に、命の尊さを説く高森代表(6月、東京都杉並区立天沼小で)

命の尊さを説く授業10年

「なぜ人を殺してはいけないのか、なぜ生きなければならぬのか、なぜ『きしょい、きもい』と言ってはならないのか」

杉並区立杉並第一小学校と、同天沼小学校で今年6月にあった授業で、高森代表は6年生にこう問いかけた。

授業では、新温泉町の中高校生らがアジアの発展途上国で体験したことを題材にする。雪害支援のため訪れたモンゴルで、生きた羊を解体する現場に立ち会い、涙を流しながら肉を食べる生徒たちの姿などを映像で流す。

発展途上国を中心に51か国を一人で旅した経験のある高森代表は、「途上国での体験を通じ命の尊さを学ばせたい」と1998年から計7回、自ら営む英語塾の生徒ら延べ132人を連れてミャンマーなどを訪問。乳幼児へのポリオワクチン

投与やサイクロン被災地支援などを経験させてきた。

高森代表は「『自分たちは恵まれているんだ』という実感が今の子どもたちにはあまりないようだ。実体験が伴う環境を整えれば、理解できるはず」と言う。

2004年度に杉並区の学校教育コーディネーター、伴野博美さん(64)の招きで、杉並第一小の外部講師を務めて以来、東京都内だけで約50か所、延べ80回を超える授業や講演を重ねてきた。

「命の授業」を一昨年、天沼小で受けた東京大付属中2年の横田海香さん(14)は「同級生に意味を考えずに『死ぬ』って言うていた。でも、授業を受けて二度と言えなくなった」と振り返る。また、格闘家の成瀬昌由さん(40)も「話を聞いて

人生観を揺さぶられた。自分も格闘技で経験したこと子どもたちに伝えたい」と懐の取り組みに賛同、被災地支援などに積極的にかかわる。

6月の天沼小での授業では、「『うざい』などと言っている人、手を挙げて」と尋ねても、誰一人手を挙げなかったが、約1時間半の授業後、一人の男子児童

が歩み寄り「勇気が出ず手を挙げられませんでした」と涙を流した。

「『きもい、うざい、死ぬ、消えろ』がどんなに重く、つらい言葉か分かりました」

「その言葉のせいでつらい気持ちの人を自分の手でどん底にたたき落としてしまおうと理解しました」児童らの書いた感想文には、そんな言葉もつづられている。

高森代表は「新温泉の子どもたちの活動を見本とした授業で賛同の輪も広がった。子どもたちの長い人生で何かしらの役に立ててもらえるよう、声のかかる限り続けたい」と話している。

教育問題で意見交換

NGO「懐」スー・チーさんと高森代表



ミャンマーで子どもたちの教育、医療などの支援活動を長年続けてきた兵庫県新温泉町浜坂の子どもNGO「懐」代表の高森拓也さん(51)が、民主化への取り組みに注目が集まる同国の民主化運動の象徴、アウン・サン・スー・チーさんと対談し、教育や死生観について意見交換した。

対談は、「懐」の活動を知ったアウン・サン・スー・チーさん側から申し出があり、10月3日に旧首都ヤンゴンにあるアウン・サン・スー・チーさんが所属する国民民主連盟(NLD)本部で行われた。

アウン・サン・スー・チーさんが個人で運営するエイズ感染・患者支援施設に寄付金を贈っていた「懐」に対し、ことし7月、活動に関する資料を送ってほしいとNLDから連絡が入ったのがきっかけ。軍政府側の締め付けを恐れた現地スタッフから同行を断られる

など事前準備は難航したが、通訳を買って出してくれた高森さんの知人の協力で実現した。対談では「誰もが聞くような政治的な話ではなく、一人の人間として本音が聞きたかった」とする高森さんの意向で、子どもの教育と社会問題を通して日本とミャンマー両国の将来について意見を交わした。

年間3万人を超す日本のお自決者問題について高森さんが助言を求めると、アウン・サン・スー・チーさんは「理解してくれる本当の友人がたった1人いるらば、自殺の脅威はなくなり、経済発展の機会がなくなる」と語り合える友を持つことの大切さを強調。また日本で青少年犯罪が後を絶たないことを踏まえ「子どもたちに人を殺してはいけない理由をどう伝えていけばいいのか」という高森さんの質問には、言葉に詰まりながら「人間には皆、より良い人になるための、より幸福な人生を送るための希望があり、それを奪う権利は誰にもない」と答えた。軍事政権の政治姿勢が全方位外交に切り替

子どもNGO「懐」 兵庫県新温泉町浜坂で地元の子どもたちを中心に活動。1995年からアジア・アフリカ圏諸国にポリオワクチンや文房具、車いすを寄贈するなど教育・医療支援を展開している。ミャンマーでは98年に活動を開始。2008年の大型サイクロンが死者・行方不明者合わせて15万人(軍事政権発表)という大きな被害をもたらすと、子どもたちが被災地に支援物資を届けた。軍事政権、NLDの双方と独自ルートで関係を築いている。

わりの、経済発展の機会が高まるミャンマーに對し、高森さんが「成長の過程で、自殺や青少年犯罪という影を抱えることになった日本とは違う道を歩んでほしい」と告げると、アウン・サン・スー・チーさんは、東日本大震災の混乱で略奪や暴動が起きなかったことを評価し「日本人には、高い自制心や義務感がある。勤勉で忍耐強い日本人なら、必ず自殺や青少年犯罪に対する答えを見いだすと信じている」と語った。

＜高森拓也 歴訪国(入国回数)＞ 2016年 1月時点

- アメリカ (NY 4回、LA 2回)
- ミクロネシア共和国 (ヤップ島・ポナペ島) (2回)
- マーシャル共和国 (マジュロ島)
 - ・ハワイ
 - ・グアム
- メキシコ
- キューバ
- ジャマイカ
- チリ (2回)
- アルゼンチン (2回)
 - (★) 南極
- ペルー (2回)
- ボリビア
- モンゴル (10回)
- 中国 (2回)
- 韓国 (5回)
- 北朝鮮
- ラオス
- ベトナム (3回)
- カンボジア
- ネパール
- タイ (3回)
- ミャンマー (31回)
- 香港 (当時・英国領)
- 台湾
- シンガポール (2回)
- マレーシア (2回)
- フィリピン
- インドネシア
- ブルネイ
- インド
- バングラデシュ (4回)
- パキスタン
- トルコ
- イラン
- アフガニスタン
- ケニア (3回)
- タンザニア (2回)
- ブルンジ
- ザイール (2回)
- ルワンダ

- ウガンダ
- アラブ首長国連邦
- エジプト
- ロシア
- レバノン
- シリア
- イスラエル
- オーストリア（2回）
- スロベニア
- マケドニア（2回）
- ユーゴスラビア（コソボ）
- クロアチア（2回）
- ボスニア・ヘルツェゴビナ（2回）

歴訪国＝51ヶ国と一地域（南極）